

長崎大学経済学部生の英語習熟度 (1)

－ 二つの英語試験と TOEIC 得点の観点から －

丸 山 真 純

Abstract

This article reports the results of two English tests administered to the students of Economics in Nagasaki University: (1) Objective Placement Test by Cambridge University Press and (2) G-TELP Level 3 . The first test was taken by students in their second to fourth year of study enrolled in “ International Communication ” class in 2010 . The second test examined English proficiency of all freshman students of Nagasaki University in the general education English class “ Comprehensive English II ” in the second semester of 2010 . Both tests consisted of three parts of listening, reading (and vocabulary) , and grammar (or language use) . The two test scores were then examined in terms of corresponding TOEIC scores . As far as the two tests administered in this study is concerned, the average TOEIC score of the students is between 420 and 440 . The scores in the two tests indicate that students’ English proficiency levels range diversely from very elementary/introductory to pre-intermediate levels (approximately corresponding to 300 through 550 in TOEIC) .

Keywords: English Proficiency, G-TELP, TOEIC Score

1 . はじめに

近年 , 学士力の一つとして , 国際コミュニケーション能力が謳われている。長崎大学においても , 高い英語コミュニケーション能力の涵養が第 2 期中期

目標¹に、また、「全学部の学生が卒業時に国際通用性を有する英語検定試験の一定レベルを超えることができるよう支援して、国際人として必要な英語によるコミュニケーション能力を涵養する」ことが第2期中期計画²に掲げられている。

しかしながら、長崎大学の学生、とりわけ、経済学部生の英語習熟度に関する調査・分析は、ほとんど行われていない³。卒業時の到達目標を定めるとしても、学生の英語習熟度に関する実態が不明であれば、その目標は机上のものとなりかねない。また、英語習熟度に関する実態が明らかになることで、適切な英語教育プログラム評価を行うことも可能になる。したがって、本調査では、この点に鑑み、経済学部生の英語習熟度の実態を明らかにすることを目的とする。

本稿は、経済学部生を対象に、最近実施された二つの英語習熟度テストの結果を報告するものである。一つは、筆者担当授業で、2-4年次生を対象に、2010年10月に実施されたObjective Placement Test(Cambridge University Press)の結果であり(調査1)、もう一つは、2011年2月に1年次生に全学的に実施されたG-TELP(General Tests of English Language Proficiency)⁴(レベル3)の経済学部生の結果である(調査2)。これらの二つの試験の結果から、経済学部生の英語習熟度の実態や特徴を明らかにし、TOEIC(Test of English for International Communication)の得点を対応させなが

1 <http://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/about/philosophy/plan/file/chukimokuhyo23.pdf>
(2011年6月22日習得)

2 <http://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/about/philosophy/plan/file/chukikeikaku23.pdf>
(2011年6月22日習得)

3 いくつかの調査は英語習熟度クラス編成に関して行われている(小笠原・西原・桑野, 2008; 小笠原・西原・桑野・金丸・Collins, 2009)。

4 G-TELPは、TOEFL(Test of English as a Foreign Language)よりも広い層の学習者を対象とするテストの開発を目指し、1980年代半ばに、米国サンディエゴ州立大学のITSC(International Testing Service Center)のロバート・ラダー、フランス・ヘノフォティス両氏を中心にプロジェクトが組まれた。現在も、ITSCが開発・運営を続けている。

ら、経済学部生の英語習熟度を考察する。

なお、本稿では、紙幅の関係から、Objective Placement Test, G-TELP (レベル3) の総点に着目した報告と考察のみを行う。領域別 (リスニング, リーディング・語彙, 文法・語法) や習熟度別の結果については、最小限の報告にとどめ、それらについては次稿にて行う。

2 . 調査 1 : Objective Placement Test

調査 1 では、Objective Placement Test と G-TELP (レベル 3) を用いて、本学部生の英語習熟度を測定した。本節では、まず、Objective Placement Test を用いて行った調査について、その調査方法 (試験の概要、実施方法、受験生等) について概説する。その後、Objective Placement Test の総点の結果、および、その総点を TOEIC 得点と対応づけて報告する。

2.1 . 調査方法

2.1.1 . Objective Placement Test の概要

Objective Placement Test (以下、OPT) は Cambridge University Press より出版されているレベル別総合英語教科書 *Interchange* における学習者の適切なレベルを見定めるためのテストである。教科書 *Interchange* は外国語としての英語学習者向けに編纂された英語教科書であり、世界で最も定評のある教科書の一つである。*Interchange* は 4 レベル、より高い英語習熟度をもつ学習者向けの *Passages* は 2 レベルがあり、合わせて、6 レベルの版が用意されている。OPT の得点に応じて、学習者に適切なレベルの *Interchange* または *Passages* が特定される (表1参照)。OPT は、事前テスト、事後テストのように利用するために、バージョン A から C までの三つの平行テストが用意されている。今回の調査では、バージョン A を用いて、経済学部生の英語習熟度を調べた。

表1 OPTと教科書 *Interchange* の対応関係⁵

Scoring Guidelines		
SCORE	RATING	PLACEMENT
1-5	1	<i>Interchange</i> Intro, first half
6-11	2	<i>Interchange</i> Intro, second half
12-17	3	<i>Interchange</i> Level 1, first half
18-23	4	<i>Interchange</i> Level 1, second half
24-30	5	<i>Interchange</i> Level 2, first half
31-36	6	<i>Interchange</i> Level 2, second half
37-42	7	<i>Interchange</i> Level 3, first half
43-49	8	<i>Interchange</i> Level 3, second half
50-55	9	<i>Passages</i> Level 1, first half
56-61	10	<i>Passages</i> Level 1, second half
62-68	11	<i>Passages</i> Level 2, first half
69-70	12	<i>Passages</i> Level 2, second half

2.1.1.2 . OPT 使用理由

今回の調査で、OPT を用いた理由は、主に、4点ある。第1に、OPT は、すでに茨城大学において、英語教育プログラムの英語クラス分けテスト（「茨城大学共通テスト」）として用いられており、さらには、OPT と TOEIC の得点との対応等が報告されているため（斉田・小林・野口，2009），調査結果を用いて、経済学部生の英語習熟度を TOEIC 得点の観点から推測が可能になることである。第2に、TOEIC のように2時間を要するテストとは異なり、OPT は50分であり、90分の授業内で実施できることである。第3に、無料で実施できることである。最後に、解答方式がマークシート式であり、個人所有のスキャナで答案を読み取り、短時間で採点が容易に完了

5 Lesley et al. (2008), p.29.

OPT の総点によって、学習者にとって適切な教科書 *Interchange*（および *Passages*）のレベルが PLACEMENT 欄で示されている。

できることである。

2.1.3. OPT の出題構成

OPT の出題構成は、リスニング (Listening) が20問 (15分)、リーディング (Reading) が20問 (20分)、文法・語法 (Language Use) が30問 (15分) の合計70問 (50分) であり、一問1点で70点満点である。解答は多肢選択式 (4択) であり、マークシートに解答する。

リスニングには、9場面 (Situation) の音声流され、それぞれの場面について、1～4問が出題される (合計20問)。後半に進むほど、流される音声は長くなり、出題数は増加する。リーディングは、8文章 (Passage) が提示され、それぞれ文章について、1～5問が出題される (合計20問)。後半に進むほど、提示される文章は長くなり、出題数も多くなる。文法・語法については、短い文が提示され、空所に適切な表現を4つの選択肢から選んで、補充を行う。合計30の文が提示される。

2.1.4. 受験者

受験者は2010年度後期開講の「国際コミュニケーション」の初回出席者105名である。本科目は国際関係コースのコース基礎科目、経済分析と政策コースのコース別科目であり、受講生の多くは、両コースに所属する2・3年生である。2年生は66名 (62.9%) であり、全員が国際関係コース所属である。残りの39名 (37.1%) は3年生以上である (特別聴講学生3名 (2.9%) を含む)。なお、受験した105名は、エクストラポイントして、OPT の総点に応じて最大10点⁶を、「国際コミュニケーション」の総評価に加点した。

2.2. 結果

2.2.1. OPT の信頼性

OPT はスピーキングやライティングといった productive な側面の測定をしておらず、リスニング、リーディング、文法・語法といった receptive な

6 つまり、OPT の総点の1/7をエクストラポイントとして加点した。

側面のみを測定している。大学英語教育においては、productiveな英語運用力の涵養も重要な教育目標である。この点において、OPTは英語習熟度の測定という面では十分とはいえない。しかし、OPTの70項目の信頼性係数は0.82⁷であり、英語のテストとして信頼に足るテストであると判断される⁸。また、他大学においても、英語習熟度のテストとして利用されていることを考慮すれば、十分な信頼性があると考えてよいものと思われる。

2.2.2. 記述統計量

OPT 総点の平均は44.64点（70点満点）であり、正答率は63.8%であった（表2参照）。標準偏差は8.4であった。最高点は60点（正答率85.7%）であり、最低点は17点（正答率24.3%）であった。歪度は-0.40、尖度は-0.07であった。歪度が負の値であるので、データの分布がやや右に偏り、左の裾野が長い分布になっていることを示している。尖度はほぼ0であるので、両裾にほぼなだらかな分布である。図1はOPTの総点の分布である。

学年別の総点の平均点は、2年生が45.38（標準偏差=8.3）であるのに対し、3年生以上は43.58（標準偏差=8.4）であり、2年生の平均点が若干高いものの、両者間に有意な差はなかった（ $t=1.18$, $p=.242$ ）。

表2には、茨城大学が全学部 of 1年生対象に実施したOPTの結果も合わせて、提示している。受験者数や理系学部も対象となっていることを考慮すれば、ほぼ似たような英語習熟度であると考えてよい。

領域別では、リスニング、リーディングと比べて、文法・語法の正答率がやや高めであり、学生にとって、文法・語法は平易であったことがうかがえる⁹。

この分布が示すように、受験者の英語習熟度には、かなりのばらつきがあ

7 茨城大学での調査においても、信頼性係数は0.82であった（斉田，2006）。

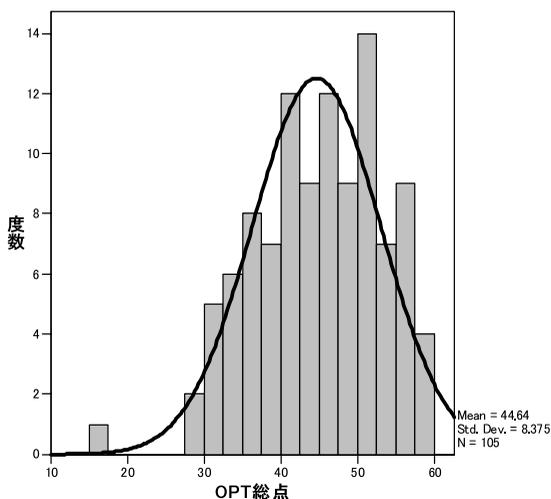
8 英語のテストでは、信頼性係数0.8以上であれば、高い信頼性を表していると考えてよいとされている（斉田，2006）。

9 領域別の詳しい分析は、次稿にて行う。

表2 OPTの平均点¹⁰ ()は標準偏差

	リスニング (20点満点)	リーディング (20点満点)	文法・語法 (30点満点)	総点 (70点満点)
本調査 N = 105	12.3 (3.0)	12.9 (3.3)	19.4 (4.1)	44.6 (8.4)
茨城大学 (2005) N = 1,750	11.3 (2.9)	12.0 (3.4)	19.8 (5.0)	43.0 (8.5)

図1 OPT 総点分布



る。先に提示した表1はOPTの総点とレベル別教科書 *Interchange* の対応関係である。受験者の英語習熟度のばらつきは、12段階に分けられたレベルの3～10(表1のRATING)に相当し、8段階にわたっている。最低点17点の受験者と、その次に低い受験者との間に、やや点数差があるので、この受験者を除いたとしても、レベル5～10に分布し、学生の英語習熟度にかなり

10 茨城大学の結果については、斉田(2006)より。

ばらつきがあるといえる。

2.2.3. OPT 総点と TOEIC・TOEFL 得点との対応

茨城大学では、OPT を「茨城大学共通テスト」として、英語クラス編成のプレースメント・テストとして、入学直後に全入学生を対象に実施している（斉田，2006）。2005年度実施の茨城大学共通テストの総点の平均は43点（標準偏差 = 8.5；N = 1,750），最高点は69点，最低点は12点であった。歪度は - 0.28，尖度は0.03であった。

茨城大学では、この共通テスト（OPT）と TOEIC IP，TOEFL ITP の得点への対応づけを行っている（斉田・小林・野口，2009）。この調査では、TOEIC IP に関しては249名，TOEFL ITP は226名から得られたデータに基づいている。この得点对応は、単回帰による、回帰式：

$$\text{TOEIC IP} = 41.70 + 8.55 \times \text{茨城大学共通テスト(OPT)} (R^2 = .41) \dots\dots(1)$$

$$\text{TOEFL ITP} = 306.03 + 2.60 \times \text{茨城大学共通テスト(OPT)} (R^2 = .38) \dots(2)$$

によって求められた。表3は得点对応表である。TOEIC や TOEFL のように、多様な難易度の問題を長い試験時間をかけて得点を細かく推定する試験と異なり、OPT（茨城大学共通テスト）は70問50分の得点範囲の狭い試験である。また、決定係数（ R^2 ）が示すように、荒い対応関係しか予測できない。しかし、斉田らの研究がそうであるように、本調査も、およその対応値が分かればよいので、この回帰式を用いて、対応関係を捉える。

この回帰式に基づけば、本調査における OPT の TOEIC IP 換算の平均点は423.36点であり、TOEFL ITP 換算の平均点は422.09点である。なお、近年は、英語圏留学のための英語試験である TOEFL よりも、国際コミュニケーションのための英語試験である TOEIC の得点が、社会一般、また、大学においても使用されるため、以後の分析は TOEIC IP の換算得点に限定して行う。図2は OPT を TOEIC IP 得点換算した分布である。

TOEIC は、その得点に応じて、A～E のレベルに分けられる（表4参照）。

表 3 OPT (茨城大学共通テスト) と TOEIC IP・TOEFL ITP 得点対応表¹¹

TOEIC IP	OPT (茨城大学) 共通テスト	TOEFL ITP
298	30	384
307	31	387
315	32	389
324	33	392
332	34	395
341	35	397
350	36	400
358	37	402
367	38	405
375	39	408
384	40	410
392	41	413
401	42	415
409	43	418
418	44	421
426	45	423
435	46	426
444	47	428
452	48	431
461	49	434
469	50	436
478	51	439
486	52	441
495	53	444
503	54	447
512	55	449
521	56	452
529	57	454
538	58	457
546	59	460
555	60	462
563	61	465
572	62	467
580	63	470
589	64	473
597	65	475
606	66	478
615	67	480
623	68	483
632	69	486
640	70	488

11 齊田・小林・野口, 2009, p.103。

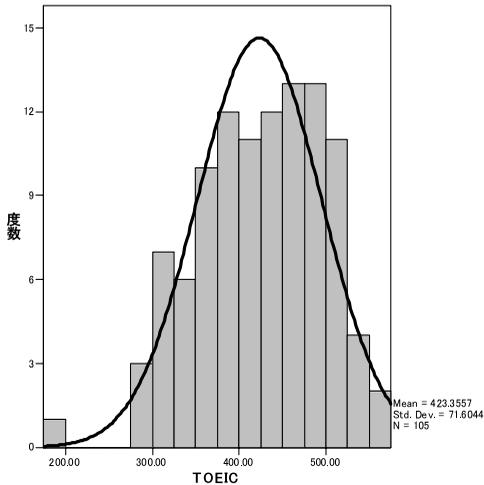
図2 TOEIC IP 得点換算の分布¹²

表4 TOEIC のレベルとその内容

A (860点 ~)	Non-Nativeとして十分なコミュニケーション能力を備えている。
B (730 ~ 860点)	どんな状況でも適切なコミュニケーションをできる素地を備えている。
C (470 ~ 730点)	日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。
D (220 ~ 470点)	通常会話で最低限のコミュニケーションが出来る。
E (~ 220点)	コミュニケーションができるまでに至っていない。

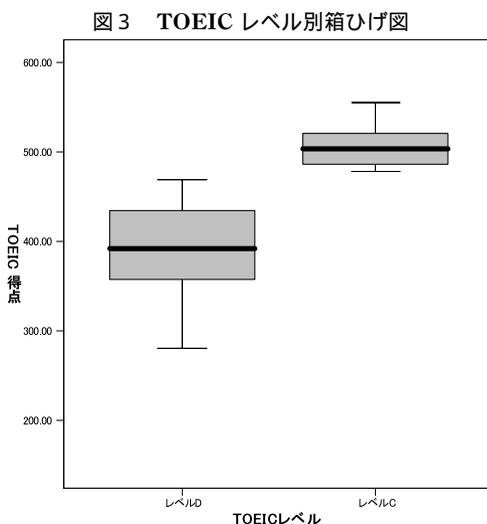
このレベルによる、受験者の分布は、レベル A, B はいずれも 0 名、レベル C が 30 名 (28.6% ; 平均 505.97 点, 標準偏差 22.7 点; 最小値 477.75, 最大値 554.70), レベル D が 74 名 (70.5% ; 平均 393.06 点, 標準偏差 51.0 点; 最小値 281.1, 最大値 469.2), レベル E が 1 名 (4.8%) であった。

7 割程度の受験生がレベル D, つまり, 「通常会話で最低限のコミュニケー

12 この図は TOEIC 得点に置き換えているだけで、図 1 と同様であるが、TOEIC 得点から習熟度を捉える事が出来るため、提示している。

ションが出来る」というレベルであった (TOEIC 400点以下の学生は39名 (37.1%))。残りの3割程度がレベルC「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」であったが、得点はレベルCが想定している TOEIC 得点範囲 (470~730点) の低い部分にとどまっている (図3参照)。TOEIC 500点以上に相当する学生数は17名 (16.2%) であった。

経済学部の1学年定員の50名程度に相当する15%によって、上位15%、下位15%のTOEIC得点がどの程度かを見ると、上位16.2% (17名) はTOEIC 500点相当以上であり、下位16.2% (17名) はTOEIC 349.5点相当以下であった。



3. 調査2 : G-TELP (レベル3)

本節では、G-TELP (レベル3) を用いた調査について、調査方法 (試験概要、実施方法、受験者等)、総点の結果、および TOEIC 得点との対応を

報告する。

3.1. 調査方法

3.1.1. G-TELP の概要

G-TELP は、「英語を母国語としない人たちが、実際の場面でどれだけ英語でコミュニケーションがとれるか、その力を測るテスト」である¹³。英語を記憶や知識としてどのくらい理解できているかではなく、考えや意見を状況に応じて伝える手段として運用できるかを測定する。その実際の場面の例としては、ショップでの店員さんとお客さんのやりとりや、お父さんと娘の会話、仲のよい友だちへの手紙、電車の時刻表に関する問題などである¹⁴。問題等は、TOEIC などと同じく、すべて回収され、公開されていない。

長崎大学では、2010年度後期、全学教育必修科目である「総合英語 II」（1 年次対象）において、全学部学生を対象として、G-TELP のレベル 3¹⁵ が課された¹⁶。レベル 3 は、「日常生活の限られた範囲の表現方法を用いて、ネイティブとコミュニケーションができる」かを測定している（土平・熊澤，2003）。表 5 は、G-TELP と他のテストとの相関表である。G-TELP（レベル 3）は、TOEIC の 400～600 点程度の受験生を対象とした試験である。

なお、以後、とくに断りがない限り、「G-TELP」は「G-TELP（レベル 3）」のことを指すものとする。

13 G-TELP公式サイト（<http://www.g-telp.jp>；2011年6月22日習得）より。

14 同上。

15 G-TELPは、受験生の英語習熟度に応じて、高い順にレベル1からレベル5までの5段階のテストが用意されている。

16 大学教育機能開発センターから、経済学部データの提供を受けた。

表5 G-TELP と他の試験の相関表¹⁷

G-TELP	TOEIC	TOEFL	英検
Level 1	990点	650点	1級
	900点		
Level 2	800点	600点	準1級
	700点	550点	
Level 3	600点	500点	2級
	500点		準2級
Level 4	400点	400点	3級
	300点		
	200点		

3.1.2 . G-TELP 採用理由

G-TELP が採用されたのは、(1) TOEIC, TOEFL, 英検などとの相関表があり、精密なテストであること、(2) 相対的に安価であること、(3) 授業時間内に実施可能なこと、(4) 20ほどの平行テストが用意されていること（それによって、習熟度の伸びを調査することが可能となる）、(5) およそ100大学で実施され、情報共有が可能なこと、(6) 結果が直ちに利用可能なことである（小笠原・西原，2011）。

3.1.3 . G-TELP の出題構成

G-TELP は、文法（Grammar）100点（試験時間20分）、リスニング（Listening）100点（約20分）、読解・語彙（Reading & Vocabulary）100点（35分）の総点300点満点（75分）で得点が算出される。実際の得点の算出は、各セクションの正答数を正答率に換算して行う。各セクション正答率75%あるいは得点75点以上で、当該レベルの習熟度に到達していると判断される。

17 G-TELP 公式サイト（<http://www.g-telp.jp/>）より取得（2011年6月20日）。

問題は非公開であるため、詳細を明らかにすることはできない。ただし、サンプル問題が G-TELP 公式サイトにて公開されている¹⁸。

3.1.4. 受験者

長崎大学では、全学教育科目として、総合英語 I～III があり、すべての学部で必修である。2010年度後期、長崎大学全 8 学部の全 1 年次生 1,560 名が「総合英語 II」の最後の授業時間を利用して、G-TELP を受験した（受験料は大学負担である）。試験の実施・監督にあたっては、事前の実施研修（50分）を受けた上で、各担当教員が行った。

この G-TELP の得点は「総合英語 II」の総合成績の 20% に相当し、2 年次に受講する「総合英語 III」の習熟度別クラス編成は、この試験の得点に基づいて行われる。次年度以降、すべての「総合英語（I～III）」で G-TELP が課され、当該科目の成績の 20% として組み込まれるとともに、習熟度別クラス編成のデータとしても用いられる。

今回の G-TELP には、経済学部 1 年次生 347 名が受験した（2 年次生以上の再履修学生は今回の分析からは除外した）。

3.2. 結果

3.2.1. 記述統計量

経済学部生の G-TELP 総点（300点満点）の平均は 193.1 点（標準偏差 = 31.0）であった（表 6 および図 4 参照）。平均正答率は 64.37%，最小値は 93 点，最大値は 284 点であった。歪度は - 0.42，尖度は 0.51 であった。歪度が負の値なので、OPT と同様、右に歪んだ、左に裾野の長い分布となっている。尖度は正の値であり、やや尖った分布である。

OPT と同様、文法領域の正答率が他の領域よりも高く、学生にとって、この領域が相対的に平易であったことを示している。他大学では、文法と読

18 G-TELP（レベル 3）については、G-TELP 公式サイト（http://www.itsc-group.com/test/mini_glt3.htm；2011年6月22日習得）にて公開されている。

解・語彙の領域で、標準偏差がリスニングよりも大きくなり、学生間の個人差が大きい傾向がみられる(表6参照)。しかし、経済学部生は文法領域でやや標準偏差が他の領域より大きく、個人差がやや大きい傾向が見られるものの、3領域の標準偏差がそれほど異なることはなかった。

平成20年度前期の全国平均が153.4点であり、平成20年度後期は161.9点であった。鹿児島大学では、全学的にG-TELP(レベル3)を課しており、先行事例として報告書がまとめられている(鹿児島大学教育センター外国語推進部, n.d.)。平成20年度前期の鹿児島大学の場合、全学部平均は159.8点、法文学部は169.1点、平成20年度後期は、全学部平均が170.7点、法文学部は184.9点であった(鹿児島大学教育センター外国語推進部, n.d.)¹⁹。

表6 G-TELP 結果²⁰ ()は標準偏差; -は報告なし

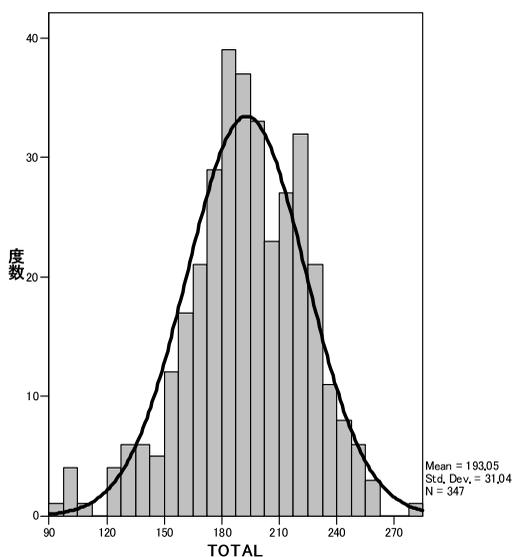
	文 法	リスニング	読解・語彙	総 点
本調査(長崎大学経済学部) 平成22年度(後期) N = 347	68.3(14.5)	64.6(13.0)	60.1(13.3)	193.1(31.0)
長崎大学全学部 平成22年度(後期) N = 1,560	66.4(-)	64.6(-)	57.1(-)	188.1(-)
全国 平成20年度(前期) N = -	59.9(-)	41.0(-)	52.6(-)	153.4(-)
全国 平成20年度(後期) N = -	64.9(-)	46.3(-)	50.7(-)	161.9(-)
鹿児島大学全学部 (20年度前期) N = 2,007	61.2(16.8)	41.6(10.6)	57.0(15.3)	159.8(33.1)
鹿児島大学全学部 (20年度後期) N = 1,832	67.8(17.2)	47.9(11.4)	54.9(14.9)	170.7(34.4)
鹿児島大学全学部 (平成21年度前期) N = 2,010	61.5(16.9)	42.2(10.3)	57.7(15.6)	161.3(33.1)
鹿児島大学法文学部 (平成20年度前期) N = -	65.9(-)	42.8(-)	61.6(-)	169.1(-)
鹿児島大学法文学部 (平成20年度後期) N = -	72.9(-)	50.5(-)	61.5(-)	184.9(-)

19 G-TELP(レベル3)には、20ほどの平行テストがあり、当然、それらのテストは、相互に、統計的に等価になるように開発されている。ただし、G-TELP(レベル3)には、平行テスト内においても誤差が±10点程度あるとされている。また、今回のG-TELPのバージョンが、たまたま、経済学部生にとって、解答し易いものだったのかもしれない。そのため、単純な結果の比較には留保が必要である。今後、継続してG-TELPの得点を検証することで、こうした点もより詳細に明らかになっていくものと思われる。

20 本調査以外のデータについては鹿児島大学教育センター外国語教育推進部(n.d.)による。

G-TELP（レベル3）の英語習熟度を獲得していると判定される、総点225点（正答率75%）以上の学生は50名（14.4%）であった。もちろん、G-TELPは各領域、それぞれで75点以上を獲得しなければ、そのレベルを獲得していると思なされないで、G-TELP（レベル3）の習熟度を獲得している学生数は、これより少なくなる。

図4 G-TELP総点



3.2.2. G-TELP（レベル3）とTOEIC 得点との対応

表7は、G-TELP（レベル3）得点とTOEIC得点の対応表である²¹。この表に基づけば、経済学部生のG-TELP総点の平均は、TOEIC得点に換算

21 G-TELPでは、G-TELP得点とTOEIC得点の対応は、表7のように、およその目安を示すにとどめている。TOEIC得点には、±40点程度、G-TELP（レベル3）の複数の平行試験内においても±10点程度の誤差があるとされるためである。したがって、対応はおよそのものとする必要がある（小笠原・西原，2011）。

すると、440点程度であると考えられる。

TOEIC 450点以上 (G-TELP 200点以上) の学生は144名 (41.5%) , TOEIC 470点以上 (G-TELP 220点以上) は71名 (20.5%) である (TOEIC 470点は TOEIC レベル C の最低点である ; 表 4 参照) 。ただ、TOEIC 500点以上に相当する G-TELP 250点以上の学生は、わずか 8 名 (2.3%) である。他方、TOEIC 400点に満たない学生も27名 (7.8%) 存在する。G-TELP の結果は、OPT と同様、多様な習熟度の学生が存在することを示すものであった。

上位15%程度 (15.6% , 54名) に相当する学生は、G-TELP 224点、つまり、TOEIC 474点相当以上であった。これは、G-TELP (レベル 3) の習熟度に到達していると見なされている正答率75% (G-TELP 225点) に、おおむね相当する。また、下位15%程度 (15.6% , 54名) に相当する学生は、G-TELP 163点、つまり、TOEIC 413点相当以下であった。

表 7 G-TELP (レベル3, 300点満点) 得点と TOEIC 得点の対応表²²

G-TELP 得点	100点以下	150点	200点	250点	300点
TOEIC 得点	400点未満	400点前後	450点前後	500点前後	600点以上

4 . OPT と G-TELP 総点から見る経済学部生の英語習熟度

本調査では、OPT と G-TELP を用いて、経済学部生の英語習熟度の実態を明らかにすることを試みてきた。本節では、本調査から明らかになった経済学部生の英語習熟度について考察を行う。ただし、考察にあたり、以下の点について、留保が必要である。OPT は、特定のクラスの 2 年生以上が対象であり、対象となった学生数も限られている。一方、G-TELP は、2010

22 小笠原・西原 (2011), p.3より。

年度入学の1年次生全員を対象としている。対象年次も対象人数も異なっている。また、OPTとG-TELPは等価な(equivalent)テストでもない。まして、両者ともTOEICとは等価ではない。したがって、両調査の結果とその結果に基づくTOEIC得点の推測は、あくまでも、荒い推測であるという限定つきで考える必要がある。

4.1. 経済学部生の英語習熟度：TOEIC得点の観点から

上記の留保をふまえた上で、両テスト結果をTOEICの得点と結びつけてみると、OPTでは、平均点でTOEIC 423.36点相当であり、G-TELPでは、平均点でTOEIC 440点相当であった。このことから、経済学部学生の英語習熟度は、平均点で、TOEIC 420～440点程度であると推測される。

両テスト結果は、ともに、20～30%程度のTOEICレベルC(TOEIC 470～730点)に相当する学生がいることを示している。しかし、そのほとんどは、TOEIC 400点台後半から500点台前半といった、TOEICレベルCとかろうじて見なされる程度にとどまっている。

学年上位50名のTOEIC得点について見てみると、TOEICレベルCの最低点である470点以上を満たしており、最高点は、高めに見積もっても、600点に達するかどうかという程度であることが両テスト結果からうかがえる。下位50名については、二つの調査で値が異なるものの、TOEIC 400点以下ではないかと推測される。

なお、経済学部生のTOEIC得点については、2011年度入学生に対し、2011年10月下旬にTOEICの受験を義務づけている。これによって、学生のTOEIC得点については実態が直接的に明らかになる。さらに、彼(女)らの3年次には、同様に、TOEICの受験が予定されている。それによって、大学英語教育および自学自習の効果が明らかになるはずである。また、2011年度入学生は、2011年度前期「総合英語Ⅰ」において、G-TELPを受験する。それによって、G-TELPおよび2011年10月下旬受験のTOEIC得点の対応関

係が直接的に検証できる。G-TELP 得点から TOEIC 得点を、より高い精度で予測することが可能になるであろう。

4.2 . 英語習熟度のばらつき

経済学部生の英語習熟度に関して、もう一点強調すべきは、習熟度のばらつき大きさである。TOEIC 換算得点では、調査 1 (OPT) からは 300 点弱²³から 550 点、調査 2 (G-TELP) からは 400 点未満²⁴から 550 点強という、かなり広い範囲に英語習熟度が散らばっていることが明らかとなった。

この結果は、一方に、基本的な英語文法・構文、そして、語彙が圧倒的に不足し、したがって、読解にも難があると考えられる層があり、彼(女)らは高校までの内容を再確認する必要がある。他方で、こうした基本的な事項は身につけているものの、さらなる努力をし、さらなる習熟度を高める必要のある上位層も存在することを示している。

こうした多様な習熟レベルに対応していくためには、習熟度別にクラス編成を行い、それぞれの習熟度に沿ったきめ細やかな指導 (i.e., 少人数指導) が求められるだろう。また、それぞれの学習者が授業外でも持続的に学習を行えるために、また、彼(女)らの学習動機づけのために、学習支援環境を整備する必要があるだろう。

23 最低点 1 名は、他の受験者から得点がかい離しているため、分析から除いた。

24 G-TELP (レベル 3) は TOEIC 400 ~ 600 点の受験者層を想定しているため、TOEIC 400 点未満 (つまり、G-TELP 100 点以下) の受験者については、G-TELP (レベル 3) 自体が適切な試験ではない。同様に、TOEIC 600 点を超える受験者にとっても、G-TELP (レベル 3) は適切ではなく、レベル 2 を受験するのが適切である (ただし、今回の調査に関する限り、経済学部生には、TOEIC 600 点を大きく超える者はほとんどないと推測される)。

4.3 . OPT・G-TELP（レベル3）の経済学部生英語習熟度測定への有効性

最後に、本稿の主旨からは離れるが、本調査で用いた OPT と G-TELP（レベル3）の経済学部生の英語習熟度測定の有効性について、付言しておく。OPT、G-TELP（レベル3）ともに、経済学部生の英語習熟度のレベルに合致したテストであったと考えられる。OPT に関しては、経済学部生の得点レンジは、OPT の最低点 0 点および最高点70点から適度に離れたものであり（i.e. , レンジ17点～60点）、経済学部生の英語習熟度を十分にカバーしたテストであったといえるであろう。

一方、G-TELP（レベル3）は、先に述べたように、TOEIC 400～600点の英語習熟度をもつ受験生を対象としたものである。経済学部生の G-TELP（レベル3）の得点は、100点以下（つまり、TOEIC 400点未満）のもの、300点（つまり、TOEIC 600点以上）に迫るものも極めて少数ではあるが存在するが、大多数は想定する得点レンジに収まっている。G-TELP（レベル3）は、今回の調査に関する限り、経済学部生の英語習熟度に適したテストであると結論づけて構わないと思われる。

5 . おわりに

本稿では、二つのテストから類推される、経済学部生の英語習熟度に関する考察を TOEIC の得点の観点から行った。経済学部生を対象にした英語習熟度に関わる調査は、これまで行われておらず、授業等を通じて、主観的な推測はできていたものの、客観的な把握は今回が初めてであった。このような実態を明らかにすることで、今後の英語教育プログラムの改善へとつなげていくことが可能になるであろう。

本稿では、総点に基づく考察であったが、次稿では、さらに進めて、領域別（リスニング、文法・語法、リーディング）、習熟度別等の分析を中心に

行い、これらの結果に基づいて、英語教育プログラムへの示唆を行う予定である。さらには、入試成績との関連づけ、学期ごとの G-TELP 得点の推移による英語教育プログラムの評価、また、TOEIC 得点と G-TELP の直接的対応づけなどを進めていく予定である。

謝 辞

本研究は、長崎大学経済学部100周年寄附金による研究支援費（課題名：「英語力の実態把握と学習支援のための調査研究」）の成果の一部である。研究助成に感謝申し上げます。

引 用 文 献

- 小笠原真司・西原俊明・桑野和可（2008）『平成19年度水産学部総合英語，総合英語における習熟度別クラス実施に関する報告書 - 量的・質的データからの分析』長崎大学大学教育機能開発センター。
- 小笠原真司・西原俊明・桑野和可・金丸邦康・Collins, Bill（2008）『全学教育総合英語における習熟度別クラス成績分布 - 平成20年度水産学部・工学部のデータ分析を中心として - 』長崎大学大学教育開発センター。
- 小笠原真司・西原俊明（2011）『報告書 G-TELP による長崎大学学生の英語学力分析：平成22年度総合英語のデータを中心に』長崎大学大学機能開発センター。
- 鹿児島大学教育センター外国語推進部（n.d.）『鹿児島大学英語教育改革報告書〈平成20年度 平成21年度前期〉』鹿児島大学教育センター。
- 斉田智里（2006）「プレースメント・テストから見た大学入学者英語力の特徴と課題 - 茨城大学総合英語プログラム - 」『人文コミュニケーション学科論集（茨城大学人文学部紀要）』1，41-53。
- 斉田智里・小林邦彦・野口裕之（2009）「外部試験を活用した大学英語カリキュラム改革：茨城大学共通テストと外部試験との関連」『日本テスト学会誌』5(1)，96-105。
- 土平泰子・熊澤孝昭（2003）「G-TELP を用いた総合英語プログラムの評価」『コミュニケーション学科論集（茨城大学人文学部紀要）』14，47-71。
- Lesley, Tay with Chista Hansen and Jean Zukowski / Faust . (2008) . *Placement and Evaluation Package: Interchange (Third ed.) & Passages (Second ed.)* . Cambridge University Press.

